

平成30年度 第4回 四万十町文化的施設検討委員会

(文化的施設ストーリーづくりワークショップと同時開催)

日 時 平成30年10月14日(日) 13:30～

会 場 四万十町役場本庁 東庁舎1F 多目的大ホール

出席委員 内田純一、池田十三生、山本哲資、高垣恵一、田邊法人、川添節子、
下元洋子、酒井紀子、刈谷明子

欠席委員 谷口和史、林 一将、青木香奈子、林 伸一、友永純子、中平浩太

事務局 川上哲男教育長、熊谷敏郎教育次長

生涯学習課(林瑞穂課長、味元伸二郎副課長)

図書館・美術館(森山典将主幹、長木千葉美、谷脇八代美、山口香、山地順子、井上千紗)

1 開 会

(事務局)

皆さん、お忙しい中、お世話になります。

今日は第4回検討委員会と、ストーリーづくりワークショップを開催したいと思います。
それでは委員長の内田先生に開会の挨拶をお願いします。

(内田委員長)

改めまして、皆さんこんにちは。今日はお忙しいところを集まっていただきありがとうございます。

今日は前回のフィールドワークの続きを具体的にやってみようということですが、私なりに、ワクワクドキドキする場所になればと思っています。「ここに泊まりたい」「ここに住みたい」と言う子がたくさん出てくるようなイメージでして、今日も闊達に意見を出していただきたいです。こんなのはダメとか思う必要は全くないです。思い切ったものをどんどん出していただいて、それをまた検討委員会で活かせればと、こんな時間にしていただきたいと思っています。

どうぞよろしく願いいたします。

(事務局)

それではさっそくファシリテーターである ARG さんにマイクを回して開始をお願いします

たいと思います。よろしくお願いします。

(ARG 下吹越)

皆さん、こんにちは。本日の司会を担当します下吹越と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

このワークショップも4回目となり、皆さんのお顔も覚えられるようになってきて、今日は皆さんとお会いできて大変嬉しく思います。

今回は「ストーリーづくりワークショップ」。前回の街歩きを踏まえて、皆さんと一緒により具体的な建物を想像していきたいと思います。

本日は私、下吹越と、ARG 代表の岡本と共にワークショップを進めて参りたいと思います。

(ARG 岡本)

今日はよろしくお願いします。

今回のワークショップで一応締めという形になりますので、悔いなく存分に、楽しくワクワクというところを大事にして進めていけたらと思います。

このあとももちろん説明があると思いますが、これで終わりというわけではなく、このあと委員会で取りまとめている基本構想に、私から報告書を出して、きちんと反映できることはしていきたいと思います。これから皆さんがやることは確実に、将来に出来る文化的施設の在り方に大きく関わってくる部分となりますので、その点を意識して進めていただければと思います。

2 議 事

・オリエンテーション「ワークショップについて」

(ARG 下吹越)

ではさっそく、今回初めて参加された方も多いと思いますので、今回のワークショップの位置づけと、前回の振り返りをやっていきます。

ちなみに今回初めて参加された方はいらっしゃいますか？

はい。元気に手を挙げてくださった方、ありがとうございます。皆さん、連続して参加してくださって嬉しいです。ありがとうございます。

ではこの「文化的施設の在り方を考えるワークショップ」ですが、文化的施設「だけ」を考えるワークショップではありません。この施設が出来ることによって町にどんな変化が発生するのか、どんなふうに皆さんの生活や暮らしが変わってくるのか。町から考え、町と繋がる施設のワークショップと位置付けています。

通常はヒアリングという形で町民の意見を集めていくのが自治体では多い方式ですが、ヒアリングだと皆さんの本当に求めているものを引き出しづらい側面もありました。ですので近年は、様々な立場や年齢の方が共同で事を起こしていく、同じ目的に向かってフランク、平等な立場で議論をしていくということをワークショップと位置付けて、皆さんの本当の意見を作り出していく場になります。

ワークショップをすることでこの文化的施設を作ることが「町が勝手にやっている」ことではなく、町民の皆さん一人一人が関わっていけることで、「私たちごと」化されるという大切なことです。

様々な立場の方と議論することで、「図書館ってただ本があるだけの場所だよ」「美術館ってただ絵を眺めるだけの場所だよ」というような固定観念を揺さぶって、「そこに長い時間滞在するんだったらどんな物があつたらいいだろうか？」を、公共施設の固定概念に囚われずに、自由な発想が生まれる場としてワークショップを位置付けています。

ですのでこれらを通して町民一人一人が主役となって、新しい図書館・美術館、そして町全体を自分たちでより楽しく、この四万十町での暮らしがドキドキワクワクするようなどこになるためにはどうしていけばいいのかを考える場になります。

この第4回でやるのは「四万十町の文化的施設の在りたい姿・ストーリーを考えよう」というものです。

例えばこれから新しい文化的施設が出来た時に、四万十町の皆さんや、町外からの観光客やお遍路さんもみんな含めて、この文化的施設を使うことで、どんな体験＝物語が生まれていくのかを考えます。この「物語」を考えることによって、新しく出来る文化的施設と私たちがどんなふうに関わり合っていけるのか、また町はどんなふうに関わり合っていけるのかを自由に想像していこうというのが今回のストーリーづくりの目的です。

ストーリーづくりについては、のちほど具体的な例を用いて説明します。

今日初めていらっしゃった方々もいるので、第4回までどのように繋がってきたのかを簡単に紹介します。

・第2回まち歩きワークショップの共有

(ARG 下吹越)

第1回目は七夕ワークショップという形で、皆さんが短冊に、文化的施設にどんな夢や希望を描いているのかを書いて、共有する場となりました。その短冊を結んだ笹を役場に飾っていただきもしました。具体的な案からふわっとした夢や希望まで、様々なアイデアが出されました。

9月はまず中高生ワークショップ。四万十町の中高生にとって図書館や美術館はどう映るのか、ワークショップを行いました。この時は中高生に「文化的施設について教えてください」と具体的に聞いてはいません。どう聞いたかというと「中高生にとって居心地のいい居場所を考えていきましょう」と問いを投げかけました。やはり新しい施設が中高生により

使ってもらえるようになるためには「行きたい」と思っただけが何より大事ですの
で。

これらのワークショップを経て前回「街歩きワークショップ」を行いました。班別にテー
マを決めて街歩きを行いました。その結果が皆さんのお手元にあるマップです。実際に町を
歩いてみてどんな魅力や課題があるのかを探しました。これものちほど共有の時間を設け
たいと思います。

大きく夢や希望を持ちながらも、それらが実際に町とどんなふうにつながるのか。第2回
までで整理してきました。これらを踏まえて今回、第3回は希望や町の現状を踏まえつつ、
そこから皆さんのどんなストーリーが紡がれていくのかを考えていきます。

前回の街歩きワークショップでは町長にもお越しいただきまして、ご挨拶を頂きました。
その際に町長から、有力予定地として旧役場跡地が挙げられました。半平さんで休憩するつ
いでに予定地を見られた方も多と思います。本当にそこに建てられるのかはまた別の話
として、ただ場所を見ただけでは何かが出来るということをイメージしづらいこともある
かと思います。なので、本当に荒地から建物が建って町にどんな変化が訪れるのか、具体
的に二つの施設をご紹介します。

まずは、岩手県紫波郡紫波町。人口3万3,000人の地方都市で、おもに盛岡市のベット
タウンになっている町です。この町の紫波中央駅の駅前に、使用好きにされた全く活用されて
いない町有地がありました。町民からは雪捨て場として使われていた場所でしたが、駅から
30秒くらいの立地なので何とか活用できないかということで、紫波中央駅前開発プロジェ
クトが立ち上がり、オガールプロジェクトというものが走り出しました。

この土地をどのように活用していくか。紫波町の皆さんが素敵なライフスタイルを楽し
めるように住む・憩う場所としてエリアを開発する動きが起こっていきました。今は、荒地
放題だった土地が区画整備されて、この中に図書館があり保育所もあり、病院もあり、パン
屋もあり、ホテルもあり、サッカーグラウンドもありと。全体的にこの場所で皆さんの暮ら
しをより豊かにしていくように、発展する町を目指して開発が行われました。10年くらい
荒地が続いていたんですが、今ではこのような形で、駅を降りたらすぐこの空間が広がる
んです。荒地だった場所を活かして、町民だけでなく様々な人が建物に集まって、憩い、
集い、暮らしを楽しむ空間が出来てきています。

もう一つ紹介したいのが、私がおもに担当していた島根県西ノ島町という離島地域です。
ここにも新しい図書館を作りましたが、予定地は荒地でした。元々はトンネル工事が出た
土を使った埋め立て地だと聞いています。

これをコミュニティ図書館ということで、ただの図書館ではなく、地域、コミュニティを
支えてより豊かにしていく目的であえて「コミュニティ図書館」という言い方にしました。
開館日は高校生たちがバンド演奏をしている様子が広がっています。これまで西ノ島町で
はバンドを演奏するステージもなかった。けれどもこういう場所を作ること子どもたち
が自己表現をできる。伝統芸能を踊る風景も広がっていて、図書館とその広場、そしてここ

の四叉路を車で通る方からも見られる。あの荒地からは想像もできない、町民の皆さんの活動が見られる場所として生まれ変わりました。

どんな場所にも町を変える可能性がある。今後、予定地の話がより具体性を持っていく中で意識していただきたいところです。それは、何もない所にこのようなにぎわいで皆さんの楽しみを生み出せることでもありますし、一方で今ある所に持っていかうとすると必ず変化は訪れます。ですので建物が出来ることで町に、皆さんの暮らしにどんな変化が起きるのかを、ぜひ今後も一緒に考え続けていけたらと思います。

ということで、ここまでが紹介でした。

このあとストーリーづくりワークショップに入ろうかと思いますが、その前に。前回の街歩きワークショップに参加していただいた方も多いため、お互いの班のマップを見合う時間を作りたいと思います。

【各班のマップを見る順番と移動の説明】

【移動先の班のマップを他班の班員が解説するグループワーク】

(ARG 下吹越)

では皆さん、よろしいでしょうか？

これから皆さんと一緒にやる作業について説明します。

皆さんには、お手元にあるストーリーボードという、皆さんが自由に考えていただくための資料をお渡ししています。これを使いながら一緒にワークショップを進めていきます。休憩を挟みながら大体 40 分くらい、「四万十町の文化的施設から生まれていく私たちのストーリー」ということで、ストーリーボードを埋めていく作業を一緒にやっと思っています。

今、町役場の職員さんや図書館員さんにもグループに入っています。ここからは、職員だからとかなしに、一町民として皆さんと意見を出し合う共同作業をしていきます。なので、町役場の方が参加されてるからといって、それが町役場の公的な認識ではないということ、あくまでも一町民として意見を出しているということ、皆さんにもご了承いただけたらと思います。

ストーリーボードを埋めていったあとに、それをグループ内で、私はこんなストーリーを作ったと紹介し合います。その中から議論も進むと思いますが、このグループを代表して一つか二つストーリーを選ぼうという形で、発表に向けて、それぞれのグループで一番議論が交わされたストーリーを選びます。それを今日のワークショップの最後に、それぞれ、私たちの班ではこんなストーリーが出来て、こんな議論が行われたと発表していただいて、まとめとしていただきたいと思います。

大きな流れとしてはそのようになります。

じゃあこのストーリーボード、どのように書けばいいのかですが、例を一応作って参りま

した。ここで紹介したいと思います。

あらかじめお伝えしておく、この例が正しいというわけでは全くありませんので、皆さんには自由に書いていただきたいと思います。なのでこの例は文字だけで書きましたが、絵がお上手な方はイラストもいいかもしれません。文字だけでなく、イラストや数字を含めるとか。

決してこれが正しい形ではないので、ここで皆さんが描くストーリーは、自由に、気楽に楽しんでいただけたらと思います。

まず皆さんに選んでいただきたいのは、例の上の欄の「テーマ」です。ここに、「こんな場所であってほしい」「こんな機能が欲しい」「こんな活用をしたい」「この施設によって町がこう変わってほしい」という四つのテーマを設定しています。この中から一つ選んでいただいて、そこからストーリーを考えていただきたいです。

このストーリーボードの例としては「こんな場所であってほしい」というテーマでストーリーを考えています。

具体的な、文化的施設を使う人の想定ですね。物語ですので自由に想像していただきたいんですが、「保育園の子どもを持つ父親（30代、窪川地区在住）」であるとまず設定しました。

ではこの利用者さんの背景を考えます。仕事が忙しくて、家事は奥さんに任せきりになってしまっている。「雨の日でも子どもと一緒に遊んだり過ごせたりする場所が欲しい」と思っているらっしゃると想定します。

ここからです。新しい文化的施設が出来た時に、このような背景を持っているこのお父さんは、どんな物語を描けるのかを考えていきます。そうすると、この「利用体験ストーリー」の枠には、例えば、この新しい施設には子どもが触ったり遊べたりするアート展示があって、子どもが気軽にアートに触れられる場所がある。子どもたちが声を上げてはしゃいだり走り回ったりしてもよい雰囲気が作られているので、親も周りに気を遣いすぎずに一緒に楽しむことができる。

このようなストーリーを、皆さんと一緒に、様々なバリエーションで考えていけたらと思っています。

ただ、ここまで細かく書く必要はないです。ここまで考えられなくて、「こういうことができたらいいな」だけでも構いません。ここまで細かく物語を作らなきゃ、と思わなくても大丈夫です。

テーマについても、一つに絞らなくてもいいです。例としては、「こんな機能が欲しい」と「この施設によって町がこう変わってほしい」も作ってみました。

これはそれこそ、前回、四万十町の中高生とワークショップをさせていただいたので、それをモチーフに考えてみました。利用者は「四万十高校に通う10代の高校生（大正地区在住）」を想定。背景としては「家と学校と町営塾を行き来するだけの生活をしてる」、「学校や家や塾以外で、友達と集まって過ごせたり、普段なかなか出会う機会のない人たちと過ご

せたりする場が欲しいと思っている」としました。

では新しい文化的施設を使って、彼女にどんなストーリーが紡がれたらいいのかを考えます。

文化的施設では四万十町の歴史や偉人のことをたくさん紹介しているので、今まで知らなかった四万十町の一面を知ることができた。館内には Wi-Fi の設備があるので、自分のスマホを使って明治維新のことを詳しく自分で調べることができた。町の偉人について研究している地域の方がお話をしてくれるイベントも開催してくれるようなので、ぜひ参加したいと思う。このようなストーリーを作りました。

ですので皆さん、身近な方々でもいいですので、お友達やご家族のことを考えながら、利用者の設定や背景を考えていただけたらと思います。

色々説明させていただきましたが、本当にここまで細かく書く必要はないですので、街歩きの様子など思い出しながら、もしくは中高生の作成したマップなどを見ていただきながら、自由に、町民や観光客などが、どんなふうに使ってどんなストーリーが紡がれるか、一緒に考えていきましょう。

この紙はたくさん用意していただいたので、たくさん考えられる方は二枚でも三枚でも物語を作ってください。

ぜひ役場の皆さんにも参加していただいて、一緒に作っていただけたらと思います。

我々が回っておりますので、何かご質問ありましたらお声がけください。

まずは 30 分くらいを目途にやっていきましょう。

【ストーリーづくり（個人ワーク）】

【個人で作ったストーリーボードをグループ内で紹介】

【各グループで発表するストーリーを選ぶ】

(ARG 下吹越)

よろしいでしょうか？

ストーリーボードが完成していなくても、まとめ直しが間に合わなくても大丈夫です。

それでは発表していきましょう。

(立候補により) 3 班から発表していただけるようなので、皆さん一旦手を止めていただいて、聞いてください。

発表の時間は質疑応答を含めて 15 分、きちんと計って参りますので、お願いします。

【各グループによるストーリーボード発表】

(3 班代表①)

3 班からは私が 2 枚を選んで、もう一人が 1 枚を発表します。

一枚目です。利用者は「40代の女性。子ども有り。夫は単身赴任中」です。背景として「自分が寛げて、子どもを楽しませることができる場所が欲しい」「毎日の生活の中でのリフレッシュをしたい」「でも時間がなくて、子どもにもついついテレビやゲームをさせて過ごさせてしまう現実がある」というものです。

利用体系のストーリーです。文化的施設にはVRがありまして、その中で様々な教育コンテンツやゲームができて、利用者同士のコミュニケーションの体験ができる。さらに本を探すアプリがそこにあって、図書館のどこにその本があるのかと困った時もすぐに探せて、子どもも本を見つけることができました。そこへ行くとVRがあってそこで楽しめて、子どもさんも親もリフレッシュできました。

芝生の綺麗なテラスもあって、子どもさんが楽しんでいる間に、親御さんはカフェオレを飲みながら寛いでいる、というストーリーです。

もう一つは「こんな機能が欲しい」で、四万十町内に住む家族のストーリーです。

近くに誰かと過ごせる場所がなく、住んでいる場所も遠方でなかなか図書館に気軽に行けません。けれども新しい文化的施設には巡回バスが通ってしまっていて、これを利用することでアクセスできるようになりました。

そして、遠くだし歳も取って出歩けなくなってきたけれど、実は本を郵送したり、近くの役場まで届けてくれたりという機能がここにはあります。読みたい本を近くの施設まで届けてもらって読むことができました。

施設にはミニコンサート場が設置されていて、巡回バスで行った時には、図書だけでなく様々なことを、友達と一緒に体験できる施設になっています。美術も堪能できて、一日が充実したものになりました。そういうストーリーです。

(3 班代表②)

こちらは4名の意見を集約して、一人の利用者ではなく家族という設定で考え直しました。

「ミュージシャンを目指す父」と「祖母の介護に忙しい母」を持つ「小学生と高校生の子ども」がいる家庭で考えました。

お父さんは演奏をする場所を求めて無料ライブをしています。お母さんは介護の技術や知識がなくて、なかなか子どもとの時間を取れずに悩んでいます。小学生の子どもは遊び相手がおらず、遠くに行けず時間を持て余している。高校生の子は母を助けるため、学費や就職に課題を感じて悩みます。

体験ストーリーでは、お父さんが施設でミニコンサートを開いたり、有名ゲストが登場する演奏会に参加したりします。お母さんは図書館の専門書で知識を得たり、セミナーに参加して技術をつけたりして、介護に生かします。子どもと季節のイベントに参加して夏休みの工作なんかを一緒に楽しんでいます。高校生の子は、施設で開催されている職業体験や企業セミナーに参加して人脈を作ったり、図書館の本で資格の勉強をしたりして、息抜きにアー

ト展を観賞して楽しんでいます。小学生の子は施設で体験できるスポーツ体験や、冬にはコタツに入って知り合った子と遊んだりして楽しんでいます。以上です。

(ARG 下吹越)

3 班の発表でした。ありがとうございます。

三つのストーリーが出てきましたが、意見や感想はいかがでしょうか？ もしくは 3 班の皆さんから、「実はこんな話も出ていた」という補足なども。

私は VR のところがすごく気になってるんですが、VR を使って具体的にどんなものが観られたらいいかという意見は出ましたか？

(3 班女性)

VR ってすごく教育コンテンツが充実してるみたいなので、Google Street Map って世界中の景色を体験できるとか、なんかこう、細胞の中に入って見られるとか、すごく小学生とかの教育にも利用できるんじゃないかなと思って、意見を出してみました。

(ARG 下吹越)

ありがとうございました。

確かにそうですね。アプリとかでも、特に解剖や医学系のアプリや VR があるんですね。自分の肌から抜けて血管や骨が見えるようなアプリって実際にあったりするんで、そういったものと上手く組み合わせられると、四万十町に居ながら本格的な学びやより深い学びができるんじゃないかという可能性を感じますね。

じゃあ何か、今の意見を踏まえて他には？

(参加者からの意見／女性)

ありがとうございます。窪川のこの場所から遠方に向けての心遣いがとても嬉しかったです。確かに十和にいると 2 時間かかるんで。十和にはもちろん図書館はなくて、子どもたちが本に身近に接する機会がすごく少ないので、バスの送迎なんかとても嬉しいんですけど、その 2 時間という時間も相当貴重なので、先ほどおっしゃった VR を使って、送迎時間の 2 時間も、そこに勉強を詰め込もうというわけではないですが、送迎の間も楽しくできるとか。

今こちらも乳幼児ラッシュで赤ちゃんもかなり増えてるので、その乳幼児でも行けるとかそういう工夫をしてくれるととても有難いと思いました。

(ARG 下吹越)

ありがとうございます。

何かその辺りについては 3 班でお話がありましたか？

(3 班男性)

実は送迎バスの他にも、図書館のほうから来てもらうという、図書館の本を JR に載せてしまつて二つの駅に持って行こうという図書館汽車の企画もありました。

(ARG 下吹越)

図書館列車とか線路が近い町ならではって感じがしますよね。ホビートレインの中にあつても面白いかもしれません。

他は何かご意見はいかがでしょうか？

(参加者からの意見／男性)

ありがとうございました。

今のお話を伺つて、遠隔地の問題ですが、どうせだったら図書館の中が VR になればいいんじゃないかなと。VL っていうんですかね。バーチャル・ライブラリー。そしたら「検索」じゃなく「探索」する楽しみが。振興局にそれがあれば。図書館の中を歩き回れば、本当にこういうのがあるかな？ と外に出ていけば、今は試し読みみたいなものもあるじゃないですか。あんな機能がくっついてればパラパラ行かなくてもある程度はできるようになるかもしれないと感じました。

(ARG 下吹越)

ありがとうございます。

実際、kindle とか Amazon なんか試し読みはありますもんね。民間レベルではそこまであつたりするので、そこがどういうふうに取り入れられるのか、絶対にないとは言切れないので、面白いアイデアだと思います。

今、岡本が出していますが、これは岡山県立図書館が Google Street view で図書館の中を見られるようにしているものです。

今の話はこういうものが見えつつさらに資料にもアクセスできたらいいよね、こんな本があると分かるといいよねっていう、発展形に感じます。

美術館ですと、こうやって見るだけでも絵画とかを観賞できるので、なかなかこちらに来られない方、もしくは足が不自由な方もバーチャルで美術鑑賞できるかもしれません。

図書館だけではなく文化的施設ということで、こういう物を使うと可能性が見えてくると思います。ありがとうございます。

では、続いてどちらの班に行きましょうか？

はい。では準備が整ったようですので、1班をお願いします。

(1班代表)

1班の発表を始めさせてもらいます。

1班では色々な世代の方が参加しまして、色々な意見が出てきて、それぞれのセンスとキーワードをまとめてきました。そこで出た中で三つのテーマにまとめられるんじゃないかと話しています。

一つが、世代を超えた居場所づくりです。

実際にストーリーを紹介しながらのほうがいいと思ったので紹介します。

20代の男性で、四万十町に来たんですけど、娯乐的なところがないので、娯乐的なくつろぎの機能を持ったプライベートな時間を過ごせる空間がそこにはあります。そこで漫画、雑誌、動画コンテンツだとか、そういったものも楽しめる場所になっています。で、若者同士、一緒に仕事もできる場所があるカフェとかもあります。

そういったものとか、例えば、高校生に居場所がないというのがあるので、映画館とか劇場とか、そういったもの。案で出たのは「デートに誘ってもおかしくない」でした。そういった内容です。

次に、この場所でも、四万十町でも世界最先端を体感できる。自然も同時に体感できるものがあるんじゃないかというのが出ました。

ストーリーとしては、「十和にいる家族」「子どもが3人いる家庭」です。背景は「近くに図書館がない」とか「楽しめる場所がない」とかがあります。そこで、せっかく四万十川にいますので、四万十川に来ている魚や動植物や虫を観察したり、館内で調べられる場所がある。そこから色々なものが学べるという場所としてあります。

また最先端というところで、高校生のボードにも結構あったんですけど、TSUTAYAとか大型施設が提供しているものがあるということがすごく大事で、例えばタブレットのような物を使って色々なサイトや雑誌などのコンテンツを楽しめて、タブレットの貸出をして家で見られるのかもいいかもしれません。そういうストーリーを考えている方もいました。

最後に、自分たちの町をよく知れる場所であってほしい。

その意味で詳しい方、この町にたくさんいらっしゃるっていうのがこのシート見て思ったんですけど、歴史とか文化とかそういうのに詳しい方がいるので、そういう方たちが活躍できる場にもなるんじゃないかという部分で出てきました。

例えばストーリーで、60歳男性が定年後に外に出る機会も減ってしまって、とりあえず図書館に行ったら、何か役に立てる場所がある。ひょっとしたらコーヒーを飲んでゆっくりできたり、自分の趣味を共有できたらいいんじゃないか。この趣味が具体的に「ガーデニング」があるので、孫と一緒に過ごしながらか、季節ごとの花が咲いている庭があつて手入れができたりとか、地元の高校生がいるので、高校生が普段作つて、一緒にやったりとか、その辺りの季節ごとの花の写真が展示してあるとかフェスがあつたらいいんじゃないかと、

そういう話が出てきました。

総じて、これまでにないというところと、将来、大きな一個のモノを作ったとしても、ずっと同じ機能を持ったまま続くとは限らないので、柔軟に、色んなニーズに対応できることが必要なんじゃないかと思ってこの三点にまとまりました。

以上です。ありがとうございました。

(ARG 下吹越)

1 班の発表について何か質問がある方はいらっしゃいますか？

私が気になったのは「世界最先端」というところなんですけど、具体的にお話はありましたか？

(1 班男性)

やっぱり四万十町という場所ですと、東京や大阪ということでは、大型の書店では、高知の書店であってもオーテピアであっても東京には敵わないです。例えばさっきの Amazon の試し読みみたいな、TSUTAYA で CD や DVD をレンタルできるみたいに、四万十町で TSUTAYA さんがすごい仕組みを作ってくれて、それが、四万十町の皆さんがお金を払ってくれと、家に居ながらにしてタブレットで娯乐的な、メールマガジンのような、ものすごくいたくさんのコンテンツが、あれやったら学業に役立つようなコンテンツまで含めて、世界中のものが手に入るようなものが、町が契約して定額でやることによって、町民の皆さんがずっとメリットを享受できるような、何か、仕組みのようなものが手に入って、箱物にお金をかけるんでなくて、そういうのが手に入ったらいいなというような話ですね。はい。

(ARG 下吹越)

ありがとうございます。どちらかと言うとそれですね。

やはり電子書籍のような形で、皆さんのお話の中で出てきている地理的な問題から、もし窪川に出来た時に、皆さんが平等にといいますか、気軽に使えるためにはどういうところになったらいいのかというところで、テクノロジーでその部分をカバーできないかという部分で世界最先端というところですね。なるほど、ありがとうございます。

他の皆さん、いかがでしょう？ 何か質問、ご意見は――

では私からもう一点いいですか？

四万十川のこととかを、ちゃんと自分たちのことをよく知れながら、アウトプットができる人が活躍できる場ということで。私、それこそ 3 班の皆さんと街歩きして、それこそ池田先生とか高垣先生とか、街歩きガイドの皆さんと歩けたことが、私はすごくもう、四万十町が二回目で全然知らなかったんですけど。

池田先生、今、町のことをよくご存じの方々が活躍できる場といいますか、集まれる場所とか、この町にはどんなところがあるんですか？ 皆さんの活動の様子を知れたらと思うん

ですけど。

(参加者か意見／男性)

街歩きボランティアガイドの「四万十あちこちたんね隊」がごございます。岸君も入っておりますので、最先端も言いたいかもしれませんが。

私はぜひ今日この会で知りえたことを、遠くから来た人にもお話しできるように、皆さんにもガイドに入ってもらいたいと非常に感じました。どうぞよろしく願いいたします。大体が私一人で頑張っているところで潰れていってますので、なんとかガイドの募集も毎日かけておりますので、どうぞ気軽にお声がけいただきまして、気軽に応じますので、どうぞいらしていただきたいと思います。アピールでした。

(ARG 下吹越)

アピール頂きました。ありがとうございます。

ちなみに今のボランティア団体のたんね隊の方々の年齢構成とといいますか、どの層が不足しておりますか？

(参加者からの意見／男性)

不足しているのはね、よそでは若い人も入って活動してくれています。うちのメンバーに山のメンバーがおりまして、百名山を登ったり。あるいは高知県の国有林とか山とかを綺麗に絵にしてしまう、森下という先生もおりまして。多彩なメンバーがおりますが、あんまり間に合わないんですね。「今どこの山にいるんだ」「富士山の頂上にいる」とかそんなことを言いますんで。

ちなみに応じ手があるような人がいたらいいと思っています。

(ARG 下吹越)

今の池田さんの、街歩きガイドの切実な訴えもありながらも、現実としてはこういう状況。じゃあそういった方々が活躍できる場で具体的にこういう場があったらという話がありましたか？

(1 班男性)

自分たちがやってる四万十手仕事市みたいなイベント的なものとかで、地域のことを知っていただけるきっかけになったり、そういうところも施設の一つ作って、いつでも誰でもすぐでも出店できるとか使っていただけるようにして、図書館ってどうしてもインプット、自分の中に入れるのが多いんですけど、実際に手を使って足を使って外に出すことも大事だよねってということもあるので、そういったインプットからアウトプットまでできる場所ってとても大事じゃないかなって、そういった形の場所になればいいねって話が皆さんあつ

たかと思います。

(ARG 下吹越)

ありがとうございます。

確かにそれが街歩きガイドも含め、理解の形までアウトプットの支援できる文化的施設だったらいいなというところですよ。

ありがとうございます。1 班の発表でした。

はい、お待たせいたしました。2 班の発表、お願いします。

(2 班代表①)

三つの案の内、一つを発表したいと思います。

ここの世代としては子育て世代の小さい子どもを持つて親、家族ですね。その家族の人たち、子ども連れで、休みは町外に出ることが多くて四万十町にいない家庭で、っていう背景があります。そんな人たちがどう利用するかというと、文化的施設があることで四万十町で過ごすこともできて、そこの施設には四万十町に関する展示ですとか、自然に親しめるような場所で、例えば今走ってる新幹線の列車やかっぱうようよ号が線路の上を動いているジオラマがあったり、あとは子ども連れ、親子連れで、幼児の頃から図書館に親しめるような施設で楽しんでいるというような利用体験ストーリーが、一つありました。

それとは別に、さっき少しお話にも出ましたが、十和地区は図書館も本屋さんもないので、日常的に本に触れる機会が、学校の図書室か、役場の図書コーナーか、自宅の本のみっていう環境なんですけど。十和地域で読み聞かせをされている方も、読む本を選ぶためには、近隣の図書館に片道 20 分かけて車で行かないといけないんですけど、その時に、高齢化のためにだんだん移動が難しくなっているっていう背景があつて。

さっき移動の時にどこからもアクセスがいいっていうのがありましたがやっぱり難しい。物理的に 2 時間かかってしまうので、子どもたちにとって読みたいと思った時にいつでも手に入るような環境っていうのが一番子どもにとっては大切です。ですので十和地域に、子どもに本を手渡すような大人とか、子どもと大人向けの図書室なり図書スペースが欲しい…あるといいなと思っていて。ある程度冊数が、例えば町立図書館が選ぶ子ども向け図書が 500 冊。プラス、子育て世代の本を 100 冊。中高生に読んでもらいたい本を 100 冊という、ある一定数が常設で借りられるような場所があつて、そこで子どもとか若者が本の世界を楽しみつつ自習をしたり遊んだりしているっていう。

たぶん窪川に出来る文化的施設にあつたらいいと思う場所が十和地域にも、小さくていいんですけどある程度クオリティーが高いものがあると、とっても楽しめると思います。

それで、単に本があるだけではやっぱり子どもも借りに来ないので、それを手渡す大人っていう人材もあると、そこで子どもたちに読み聞かせをしたりとか、おススメ本を勧めたり

するような世代間交流もできるし、ボランティアの方をお願いするとそれは有償ボランティアで一つ仕事が生まれたりとか、そういうような利用体験ストーリーができるなあっていうのを考えました。

(2 班代表②)

それからもう一つ、別の角度から少しだけ付け加えたいと思います。

利用者の視点からは三つの視点で分けて、一つは町民全体、お年寄りから子どもまで利用できるということ。それから観光客ですね。四万十町はたくさんのお遍路さんなんかも来ておりますので、そういった人たちを対象とするという観念。それからオールラウンドというようにさっきもありましたように、子育てをしている人たちが居場所として、何らかの施設として利用できるようなもの。

こういった人たちを利用者として挙げさせてもらいました。

背景としましては、この町の現状を考慮した上で、話をさせてもらいますと、一つは高齢化率が非常に高くなっていると。今の 40%後半くらいですかね。だから町の人口の半分くらいが 80 歳以上のお年寄りになってしまうということですね。そういった人たちが利用できることがまず大きな柱になるのではないかと。

それから二つ目が、子育て支援としての居場所。

そして三つ目が、観光客が利用できる場所。特に「四万十町で思い出を作ってみませんかスペース」というのを作ってですね。これは色んな方が気軽に利用できるようなものが必要ではないかと思いました。

それからストーリーの中にはですね、ストーリーにはなっていないんですけど、観点ということで付け加えさせてもらいますと、場所について意見が出ました。イラストを描いてくれて、こういうイメージですね、一階は駐車スペースにして、二階・三階は施設にして、屋根はソーラーパネルとかなんとか。それからその向こうには茂串山が見えるというような、壮大なスケールのイメージを描いていました。

この中にどういったものが必要かという、中に多目的ホール、共同学習スペース、個別学習スペース、映画などを上映できる映像視聴室、美術館の役割を果たす芸術鑑賞スペース、本の読み聞かせなんかを行える乳幼児スペース。それから、文化財展示室。町内で発見された遺物とか古文書とかそういったものができるだけ展示できるスペース。それから避難所に使える和室。こういったものを兼ね備えていれば充実したものになるのではないかとということが出てきました。

それから最後になりますが、様々な交通手段にできるということ。例えば車を持っている人だけではなくて、鉄道を利用する。あるいは中高生であれば自転車ですので、そういった人たちが気軽に寄れる場所も重要ではないかということが出てきました。

それから開館時間についてです。町外の図書館では夜遅くまで開館している場所があると聞きました。できれば 8 時 9 時ぐらいまでは開館できるようにすれば、仕事が終わった

人たちが利用しやすい。そういう配慮も必要という意見も出てきました。特に遅くなってきた場合の職員の勤務のことが出てきますので、それを補うためにも町民のボランティアを積極的に活用する。そうやって開館時間を夜まで活用できるという提案がありました。

ちょっと補足になりますが、以上のことが出てきましたので、何かありましたらご質問をお願いいたします。

(ARG 下吹越)

はい。こちらの班もストーリーは色々出てきてるんですけど、ストーリーづくりに留まらず、ソフトやハードはこんなだったらいいよねってところまで話が膨らんでました。ありがとうございました。

また興味深いストーリーもたくさん出てきているので、あとで私もじっくりそれぞれのストーリーを見せていただくのがとても楽しみです。

ご意見、ご質問はありますか？

(参加者からの意見／女性)

ありがとうございました。

私も人口減少や高齢者の人口が上回るとこにすごく興味があります。今は1万7,300人のものが40年後には5800人程度になり、子供より高齢者の数が上回っている図式の中で、施設が出来たとして、ボランティアの方をお願いするとしてその方も結局高齢者になると思います。金銭的・時間的に余裕がある人、それとスキルも高い方になると思います。

その場合、アウトプットする場がなくて、今地域を守る方たち、ボランティアでやっている方たちと繋げるような、役場のほうもそうですし、一般人としてもその方たちにアクセスするにはどうすればいいのかが全然分かっていないので、その辺りの繋げ方でアイデアがあればお聞かせ願いたいです。

(ARG 下吹越)

難しいですよ。でもいい質問で、ご指摘はもっともですね。

多くの自治体で図書館施設、文化的施設を作っていく中で課題になるのは人の問題です。そこにどういう人がどんな形で関わっていけるのか。ボランティアでなくても今はサポーターという言い方をして、まさにこういうワークショップをやっている段階からサポーターを集めて一緒にやっという動きが大きくなっていくところではあります。

ただ今後、中長期的に見ていく中で、人数減は日本全体が抱えている問題なので、例えば四万十町だけではありませんが、どんな方でもボランティアに来てくださって構いませんよという、例えば高知市の方でもいいですし、四万十町出身でも県外・海外に住んでいる方からも何かしらボランティアの役割を貰えるような、そういうネットワークを広げていくことも、現実的には考えられるかもしれません。

この町の中だけで見てしまうと、実際にその場にいる方は減っていってしまうので、さらに緩めた形で、高知県全体、もしくは四国全体、そして日本全体を見た時に、どんな世界とこの町に溶け込んだ繋がりが生まれているのか。もしかしたらこの文化的施設が可能性を秘めているかもしれません。

そういうとこまで考えられるボランティアのお話と人口減という課題に向かっていく、重要なご指摘だと思います。ありがとうございます。

(ARG 下吹越)

はい。大変濃厚な発表で、皆さん緊張されたかと思いますが、リラックスしていただいて。ワークショップ自体はここまでで終了といたします。

このあと関係者の皆様から講評を頂いて、記念撮影をしてこの回を終了します。

ではまずは内田先生からご講評を頂けますでしょうか。

・講評

(内田委員長)

ありがとうございました。どうも今日はお疲れ様でした。

伺っていた中で一つ感じたことをお話したいと思います。

今日お話を伺えば伺うほど、全然、実現不可能ではないなと改めて感じています。できそうだなという感じがいたします。

私なりに感じ入った言葉は「他に行かなくても」ですね。最先端を体験し、自分らしさが発揮できる。要するに他に行かなくても、ここにいて最先端を体感できるんだということ、実際にそういう場を作れるんじゃないかなというところを強く感じました。そこで全ての人に出番があり、いる場が作れるんじゃないかと。

池田さんがガイドのことをお話していたんですけども、それは結果的にはみんながガイドになれるような、そういう場になるんじゃないかなと感じました。

それが今日全体の感想です。

これからのことですが、今日ワークショップを開いていただいて 3 回ですね、これらを検討委員会でも改めて活かしながら考えていきます。

ワークショップの場で「こんな図書館を作りたい」と我々が考えていることを、こんな場だけではなく、これから先も PR していく必要があります。今日参加してくださった皆さんにはぜひ、帰ってから隣近所に住んでいる方に「図書館を作りたいけどどんなのがいいでしょう？」と、図書館のことを巡ってたくさんの論議や話し合いが身近で生まれるような環境を作っていくことがすごく必要だと感じています。

例えば具体的には、色んな催し物がこれからも四万十町で開かれます。一番近いのは米こめフェスタですかね。そこで検討委員会のブースを一つ構えて、図書館について、そこに来

る方に簡単な意見を尋ねていくとか。「今作ってるんだけどどういうものがいいでしょう？」と、そういうことを聞いてみるブースが米こめフェスタにあってもいいんじゃないかとも思うわけですね。そういう機会をできるだけ利用することが必要だと思います。

そのための情報は行政のほうが分かっていると思いますので、ぜひそういう機会を用いて、場を増やしていきたいと、私なりには思っておりますので、また可能な限りご検討いただければ幸いです。

こんな形で今日頂いたものを、検討委員会のほうでもさらに活かして、ますます町内で論議が活発に行われる機会を作っていきたい。こう思っている次第です。

まとめになりますが、今日はありがとうございました。

(ARG 岡本)

今日は皆さんありがとうございました。

いくつかのグループで話しましたが、本当にすごいと思いました。何がすごかって、今まで他の自治体でやってきて、ストーリーボードづくりはもうちょっと時間がかかります。苦戦される方が正直多いんですけど、ものすごい速さですね。それはたぶん皆さんの中で、こういうことをしていきたいという希望が詰まっている、非常にいい状態にあるからなんだろうと思います。

内田先生からもありましたが、ワークショップ自体は、基本構想ではここで終わりなんですけど。

これは例えば先週、鳥取県智頭町でやったワークショップです。智頭町はここより 2 年早く計画が進んでいて、今は建物の設計をしています。来年 4 月から工事に入って、再来年 4 月にはオープンします。

これ、ワークショップの最後には記録写真を撮っていますが、70 人来てます。ちなみに町民数 7,000 人。つまり 1%の人口が毎回参加しています。はっきり言ってワークショップをやる側は、えらい 70 人が支えなんですけど、今日聞いていて四万十でもこの熱さが広がっていくといいなと思っています。こういう密なワークショップじゃないかもしれないですが、またここに集まる時には、1 万 7,000 人の 1%、170 人会議とかやりたいとか非常に強く思いました。

これはちょっと具体的な話ですが、今回非常に話が進んできたと思ったのは、どのグループにもテクノロジー・技術を徹底して利用していこうという意見が出たことです。これ本当に重要です。私は昔 Yahoo!で働いていましたのでむしろそっちが専門です。地方だからこそぜひ技術を活用しまくってください。インターネットが登場して、私は十数年インターネットサービスを作ることになり人生を捧げてきましたが、その時に信じた理想は「これで地域間格差がなくなる！」です。実際はかなりいいところまで来ています。

2020 年には皆さんお持ちのスマートフォンなどの通信方式が倍に、ものすごいスピードになります。これは画期的です。どれくらい変わるかということ、今がスポーツカーくらいの

速さだとしたら、飛行機並みになる。体感的に「待つ」ということがほぼなくなります。何か気になってポンッとクリックしたら一瞬でダウンロードされるようになります。それによって何が変わるかというと、一番期待されているのは、オンラインでの遠隔コミュニケーション、特に映像配信が画期的に便利になると言われています。

例えば島根県海士町という自治体、県内だと土佐町が熱心に導入を進めていますが、オンラインの遠隔授業システムです。

今や小さな画面の中じゃなくて等身大スクリーンに他の教室を映し出して、一緒に受講するということはかなり可能になっています。これは非常に期待されるわけですが、8Kというこの仕組みが普及して、2020年以降大幅に安くなると思われます。そうしますと、こういった、ごくごくカジュアルに電話会議みたいなものが常にできる時代がやってきます。ここら辺をぜひ皆さん勉強してください。こんなこと実はできるんだっていうことを、知れば知るほどもっと新しい発想が出てきます。

もちろんハコを一つ作る。これは美術館としての機能もあるのでごく大事ですが、一方で、ハコだけ作ればいいだけじゃないんです。情報通信のシステムをいかに活用するかどうかというのは、地方都市にとって死活問題です。そして残念ながら我が国の地方都市の多くは、難しいんでそういうのよく分かんないって逃げちゃうんですね。でも逆に考えれば、他の多くの自治体がそこから逃避してるのであれば、そこに力を入れれば一歩抜きん出ることができるわけです。

実際 ARG も海士町に長く関わってきましたが、海士町で育つ高校生はめちゃくちゃ優秀です。学力的にも普通に東大・京大に入る……のが全てとは言いませんけど、教育レベルが一新しました。

おそらく土佐町の嶺北高校は特に伸びてくるんじゃないかと思います。なぜならそこには海士町をそうやって変えた人が入っているからです。

その中でやっぱり重要なのは技術だと知っておいてほしいです。

図書館を作る、文化的施設を作るって、皆さん自身による学びがすごく大事になるので、せっかくオーテピアもありますし、もちろんこの町にも図書館があります。図書館の人に「もっと先端の技術についての本を知りたいから教えて」「図書館ってどんな本があるの？」って、どんどん図書館を使い直して、図書館で住民自身がパワーアップするというふうにしていただけたらと思います。

これから作っていくのは文化的施設ですが、図書館に限って言っても、図書館はその地域の自治体の住民のレベルにふさわしいものしか出来ませんし、皆さんのレベルに見合ったものができると思います。つまりその地域の人が低いレベルであれば低いレベルの図書館しか出来ません。しかしより高いものを目指せば、より高いものが必ず皆さんの手に入ります。それを支えていくのがまさに生涯学習であって、皆さん自身がよく分からないんだって捨てずに、もっともっと新しい技術を手に入れていけば、そこに投資をプラスしていけば、私たちはもっとすごい町になれる、と確信して、これからの検討に役立てていってほしいと

思います。

私からは以上です。

最後に教育長からご講評を頂戴したいと思います。

(川上教育長)

皆さん本当に今日はありがとうございました。

岡本代表から素晴らしいヒント、または素晴らしいアドバイスがありました。町のほうでもそれをしっかり受け止めて、皆様方がこうやって集まり、ワークショップという形で様々な思いやご意見をたくさん頂きました。

この図書館・美術館、郷土資料なども含めて文化的施設。町づくり、人材育成、それから未来を考えた施設であると改めて感じました。

先ほど岡本代表が話されましたが、私はちょっと出損ねて上がっていて、次長が「もうまとめる時間になるぞ」と。本当にあの短い時間でよくまとまったなあとびっくりして、下りてきてお話を聞いていました。本当にすごいと思います。

私も、皆様方にこうして関わってくださって本当に嬉しいと共に、今日は先を見通した近未来的なお話も色々ありました。皆様がリフレッシュできる、あるいはミニコンサートやコタツの話も出ておりました。それと移動バスの中で、十和地域、大正地域の中に今はないですけれども、新しい施設が出来た時に、その移動手段、移動時間の活用、子どもたちが満足行く形であるとか、本当に皆様の素敵な、私も聞いていて、図書館・美術館、郷土資料も含めたすごい施設が出来るとはなかろうかと改めて思ったところです。

またその中でも大事にしていかなければならないのは、繋げていくことです。人同士でも図書館とでもそうですが、町の挙げての繋がり、外へ向けての繋がり、本当に大事なところが色々出てきたと思います。

そういったところで、ワークショップ、これから先描いていくところが出たなというところで、今後の基本構想に向けて、それをまとめて分けていくわけですが、また皆様方にはこういった機会にぜひとも、1%ということで、そういった話も出ておりましたけど、そういった人々にとにかく出て来ていただいて、とにかく自分自身が参画するのもそうですし関心を持つということもありますけれどもそれ以上に、自分のものにしていくということも大事なことでなかろうかと思っております。

本当に今日はそういった意味で、素晴らしいワークショップということで、また先が描いてこられたと思っています。皆様方に感謝をいたしますと共に、今後また基本構想に向けて進んで参りたいと思いますので、今後とも皆様方には知恵を貸していただいて、また皆さんと共にそういった施設をぜひ作って、それと皆さんが色んな紹介のできる、自分の町が誇れるような町づくりに向けての施設に出来たらいいと思っています。

本日はいつもお世話になっておりますアカデミック・リソース・ガイドの岡本代表、下吹越さん、そして内田委員長、本当にありがとうございました。そういったことで来ていただい

た皆様に感謝を申し上げまして、私の感じた所と、お礼の挨拶にさせていただきます。本日は本当にありがとうございます。これからもよろしくお願いします。

(ARG 下吹越)

では皆さん、最後に記念撮影を致しまして、この回を終了とさせていただきます。

3 閉 会